教職の魅力創造プロジェクトから得られたこと

藤田千世(山形大学地域教育文化学部児童教育コース４年)

１．学びのフォーラムから

学びのフォーラムへの参加は、自分の考えや思いを形成している、根本に立ち返る経験でした。

本プログラムを通して、学ぶということや教えるということの意味を考える基盤をつくることができました。これまでなんとなく使っていた「学ぶ」「教える」ということに対する考えを形成するとともに、むしろ自分の中で、これらの言葉の輪郭がぼやけていたことを自覚するきっかけにもなりました。自分の研究を進める中で、同じ大学生や大学の先生方、現職の先生方、地域の方々など、教育に携わる多くの人とお話してきました。その中で、自分の考えを伝える時も相手の考えを聞く時も、「これは本当に学びになっているのか」「これは本当に『教える』ということなのか」など、自分自身や相手と対話しながら、常に「学ぶ」「教える」ということについて考えを深める基盤ができたように思います。

「できる」「考える」「遊ぶ」ことについて高校生や社会人と考えを深め合い、自分だけでテキストを読んで考えるよりもどんどん考えが深まっていくことにも面白さを感じました。何度参加しても得るものがあり、何度も参加したくなるプログラムです。

２．小学校教職体験セミナーから

小学校教職体験セミナーでは、参加した高校生の生の声を聞き、教職に対する思いを知ることができました。

高校生の中には、教職に興味があって本プログラムに参加したものの、自身の進路を定めなければならないということに不安を抱えている生徒がいました。教職にも興味があるが他の仕事にも興味があるという生徒や、自分のやりたいことが分からず焦りを感じている生徒など、その不安の背景も多様です。

私自身、高校生の段階ではやりたいことが決まらないまま、教育学部に進学しました。だからこそ、本プログラムに参加した高校生の漠然とした不安に、強く共感しました。高校生の話をよく聞くと、「このまま大学に進学してよいのか」「どうやってやりたいことを見つけたらよいのか」という悩みを持っているようです。

体験を通して教職について知る本プログラムでの経験は、このような悩みや不安を抱える高校生にとって、大きな転換点になったと考えます。教職を学んできた私も、微力ながら、進路に対する高校生の不安に寄り添い、教職の面白さを伝えることができたのではないかと思います。

教職の魅力は、小学校から高校までの学習体験からも知ることができますが、実際に先生という立場で子どもたちと接したり、教職について深く学んだりすることで、より実感できるものです。その点で、本プログラムは高校生にとっても教育に携わる私達にとっても、意義のあるものだと考えます。